

つくば奮闘記

本年5月より、当社が JICA 筑波で実施している「小農支援のための野菜栽培技術とマーケティング手法」コースにて研修指導業務を学び始めて6カ月が経過した。

この間、研修指導に必要とされる能力向上として強く感じたことは、第一に研修員が自国で適応可能な技術を習得させるために、指導員は幅広い知識と経験が必要だということである。多品目にわたる野菜生産技術に関して品種の選定法から作型の決定、栽培管理からマーケティングまで一貫した知識と技術を研修員に移転していかなければならない。そのためにも、研修員と遠慮無く意見を言い合える関係をつくることが重要だということである。彼らが研修期間を通じて行う個別実験の策定から管理に至る一連の流れを、的確に指示していけるコミュニケーション能力があつてこそ、彼らからの信頼が得られ、その上で現地に適応可能な技術習得につながると感じている。この様な関係を研修員全員と持つことで研修全体が引き締まり、まとまっていくのだと感じた。しかし、これらは一朝一夕でできるものではない。研修員に敬意をもって接する事を基礎に、唯々経験を積んでいかなければならないと学ぶことが出来た。

同時に嬉しかったことは研修員と公私にわたる深い触れ合いの場を共有できたことである。今年度の研修員は11か国12名だった。それぞれの国の実情は大きく異なるが、それでも彼らは時に互いに冗談を言い合いながらリラックスし、そして切磋琢磨しながら、少しでもこの研修期間で得たものを自国の農業に役立てようと研鑽を積んでいた。このような研修員同士のチームワークも9カ月間に及ぶ研修期間において重要である。私は研修業務の補佐という形で途中からコースに関わったが、毎日の研修や、研修旅行への同行を通じて彼らの努力や真剣さ、明るさなどから学ぶことが多かった。その研修員も11月上旬に帰国の途についた。彼らは帰国後、真っ先に農家と接する場に直面する。彼らが研修で学んだ技術や知見はダイレクトに農家に還元されるであろう。現地の普及業務を担って行く研修員と接することができたことは、国際協力に身を置く者としてやりがいを感じると同時に幸せなことである。

ところで、私と野菜コースとの関わりは2011年に遡る。当時私は農業者大学校で農業を学ぶ学生であり、JICA 筑波が実施している「大学生・大学院生国際協

力理解講座」に出席したのが最初の出会いであった。当時も多くの研修員と接することができ、開発途上国の普及員が何を求めて日本に研修に来ているのか、その一端を学ぶことができた。特に印象に残っているのは、病害虫診断や肥料計算など、直接農家へ還元できる技術に興味を持っていたことである。一番の収穫は、農業支援による国際協力をより身近に感じることができ、モザンビークでの活動に生かしたことである。

2012年に農業者大学校を卒業したのちモザンビークに青年海外協力隊野菜隊員として赴任した。農業省所管のインヤンバネ州ジャンガモ郡経済活動事務所が配属先で、南部の海沿いである。担当地域の農家のほとんどは自給用栽培であることから、現金収入を求めて南アフリカに出稼ぎに行く人も多い。このため、換金作物の収量向上と同時に販売などのマーケティングが求められていた。私は普及員と共に農家や地域を巡回し、郡全体の収入向上を目指して活動した。しかしながら、7人いた普及員のコミュニケーション不足から、地域の課題をくみ上げることが出来ず、農民への技術普及が満足にできない状況にあった。そこで私は定例の会議などの際に、同僚の良い点を引き出し、困っている部分や問題点について話し合い勉強会を実施し、お互いの知識や経験が結びつくように共有を促し、農家への波及効果を図った。

研修員が帰国後日本で得た知識、技術をどのように自国で普及していくかは、大事な課題だと考える。研修業務の補佐をしながら、またモザンビークでの経験を振り返り、研修員が本邦研修で学んだ知識や技術を現場でうまく生かしていくことを望みたい。



研修員と共に学ぶ

(2015年11月五百木)